

**2024(令和6)年度 地域連携交流サロン**  
**地域の課題解決に向けた連携の新たなカタチとは**  
**～「育てる拠点」をハブとした市民・行政・企業・大学が共創する持続可能なまちづくり～**  
**開催報告**

日時：2024(令和6)年11月29日(金)18:00～20:30  
会場：茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」(大阪府茨木市駅前3丁目9番45号)  
ゲストスピーカー：向田 明弘氏(茨木市 市民文化部 副理事 兼 共創推進課 課長)  
                                笹井 直木氏(茨木商工会議所 専務理事)  
司会・コーディネーター：久 隆浩氏(大学コンソーシアム大阪 地域連携部会推進委員会 委員長、  
  近畿大学 総合社会学部 教授)  
参加者数：計13名  
                        <内訳>大学教職員：7大学8名、自治体関係者：2市3名、企業：1社1名、  
  その他：1名(医療機関)  
企画・運営：大学コンソーシアム大阪 地域連携部会

## 1. 開催趣旨

本サロンは、大阪地域の地域連携活動に携わる人々の繋がり創出と連携促進に寄与することを目的として開催している。今回は、茨木市と茨木商工会議所よりゲストスピーカーを招き、市民と行政が協働で創り上げた茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」を会場に、市や大学、事業者、市民等の多様な主体が連携協働するスタイルについて考える機会とする。

## 2. プログラム概要

### (1) 施設見学

ゲストスピーカーである向田氏の案内のもと、参加者とともに会場である「おにクル」の館内を巡り、各階の機能が“縦の道”によって有機的に結びついている様子を見学した。



館内見学の様子

### (2) 話題提供(以下、発表要旨)

#### ■ 向田氏

「おにクル」は、「ハコモノ」にはしたくないという市長の意向もあり、市民と行政の対話を重視し、ゼロベースから共創のプロセスを経て生まれた施設である。無作為に抽出した市民5,000人に参加を呼びかけ、市長との直接対話を重ねながら、必要な機能を検討した。その結果、「育てる広場」というキーワードが生まれ、市民が主体となって空間を創り上げていく「可変性」を重視した施設となった。また、茨木市内の6大学と連携し、定期的な会議や展示会を開催するほか、「チャレンジいばらき補助金」を活用し、学生の活動を支援している。市内には多くの学生がいるが、彼らを単なる利用者としてではなく、地域活動の主体者として巻き込むことを意識している。

#### ■ 笹井氏

茨木商工会議所は、全国的にも珍しく、立命館大学いばらきキャンパス内に設置されている。地域資源を活用した事例として、市内の日世株式会社と連携し「茨木バニラホップ」というビールの香りがするソフトクリームを開発した。

また、東京五輪では、陸上ホッケーオーストラリア代表チームの合宿誘致に際し、商工会議所が資金調達を担った。今後は、プロボノ(仕事で培ったスキルや経験を活かしたボランティア活動)を活用した新たな地域連携の可能性を模索していく。

#### ■久氏

茨木市では、商工会議所と市役所の連携関係が構築されており、「町の賑わいづくり連絡会」を定期的  
に開催している。普段からの顔合わせを通じて、自然と連携が生まれる仕組みが確立されている。こ  
うした関係性の中で、「顔合わせ、心合わせ、力合わせ」という姿勢が重要であると考えている。



講師：笹井氏（左）／向田氏（右）

司会・コーディネーター：久氏

#### (3)意見交換、質疑応答

久氏の進行のもと、活発な意見交換が行われた。要旨は以下のとおり。

##### <大学と企業の連携の可能性について>

Q1. 大学との定期的な意見交換会には、商工会議所や民間企業等も参画しているのか。

A2. 現状では、行政と大学のみが参加している。2024年に入ってから、企業との連携も模索しているが、企業と大学では求めるものが異なっており、調整が難しいのが実情である。集まることが目的となっているプラットフォームよりもプロジェクトベースの集まりの方が、目的が明確である分、参加者は前向きになり、主体性も生まれると思う。(向田氏)

##### <市民の主体的な関与について>

Q2. 無作為抽出した市民から、主体的に動き出す人材を輩出するのは難しいと思うが、その仕組みはどのようなものか。

#### A2. ■段階的なアプローチ

- ・社会実験段階に入った際に、既に何らかの活動をしている市民に個別に声をかけ、市民活動の現場に足を運び、共に楽しみながら勧誘した。
- ・初動は、そのようにして集まった人たちと、無作為抽出者の中でモチベーションの高い人材が合流し、市役所も協力してイベント企画などを推進した。
- ・そのうち、新たに賛同する層が現れ、揉め事を伴いながらも徐々に主体的になっていく様子が見られた。
- ・小さなことから始めると広がり、いずれは自走できるように成長するだろう。(以上、向田氏)

#### ■地域性

- ・茨木市では昔から事業者が街づくりやイベントを積極的に開催する土壌があり、中小企業が自ら資金を出すことも多い。そういった人が集まると資金も集まり、そこに学生などの若者も集まるという風土があり、それがプラスに働いていると考えられる。(久氏)
- ・グラウンドの利用を例にしても、事業者が自主的に利用し、資金として補助金を申請するケースが多い。ある地域では地域の重鎮が中心となり、住民主体でイベントを行っているが、新参者も受け入れる地盤もあると感じる。そのような土地柄の要素も大きいように思われる。(笹井氏)

<地域の担い手の減少問題について>

Q3. 大阪では地域活動の担い手が減り、盆踊りも開催できない地域があり、災害時のことを懸念している。茨木市では、「おにクル」での活動が地域に波及する例はあるのか。

A3. ■「おにクル」の役割

・「おにクル」に集まるコミュニティはテーマ型であり、明確な目的をもっている。地縁型のコミュニティの代替にはならないかもしれないが、災害時の連携や互助などにおいて補完的な役割を果たすことができるように思う。誰でも参加しやすく、地域にも溶け込みやすいコミュニティであり、自治会等に入らなくても、そのようなコミュニティで関係性を築けば、災害時に役立つ可能性があると考えられる。(向田氏)

■茨木市の地域コミュニティの特徴

・茨木市では、自治会が地域を仕切っているわけではなく、事業者が自治会長を務めている地域も多く、自らイベント型のまちづくりを行っている人もいる。地域コミュニティとテーマ型のコミュニティは、必ずしも対立しているわけではない。(久氏)

■地域活動の担い手

・商工会議所の会員で地域活動を担っている人は多い。PTA 活動等で後継者がいない場合は、地域企業の社員がその役割を引き受けることもある。公民館長が商工会議所の会員であるなど、様々な役割が重なり合っている印象がある。(笹井氏)

<継続的な地域活動の工夫>

Q4. 茨木市では、ワークショップや社会実験を8~9年かけて行っているようだが、これは最初からの計画だったのか？

A4. ・最初の段階でスケジュールを組んでいた。「育てる広場」というコンセプトを掲げた以上、途中でやめることはないという覚悟があり、工事を進める中でもワークショップや社会実験を継続した。(向田氏)

・市民の意見を聞きながら設計を進めるために、設計事務所の選定の際、ワークショップへの参加を必須条件とした。(久氏)

Q5. 施設見学の際、1階に子どもの遊び場があり、そこから子育て支援の相談に繋げるフレキシブルな仕組みがあることに感銘を受けた。茨木市という大きな市がこのような仕組みを導入していることに驚いた。(感想)

A5. ■「もっくる」(子どもの遊び場)の成り立ち

・「もっくる」は、市役所内における“子育てを超えた議論”からスタートした。子育て関連の部署のみが担当すると目的が明確である必要が生じるが、「何かのついでに相談できること」を中心的なテーマとして、市民ワークショップの意見を取り入れながら、子育て以外の部署とも連携しながら生まれた。単体ではなく複数で進めることがポイントだったように思う。前を向いているなら多少の緩さは容認するという市長の方針も影響しているだろう。(向田氏)

■茨木市役所の特徴

・長年にわたり茨木市役所と関わる中で、ポジティブ思考の人が多く、部署ではなく、人の繋がりの中で仕事をしている傾向が昔からあるように思う。(久氏)

Q6. 運営の段階で、市民を巻き込む工夫はどのようなものか。

A6. ■運営体制

・様々な団体、企業、部署が関わり、非常に複雑な体系となっていることから、全体で情報共有するための会議体や、意思形成を図る会議体などがある。運営への市民参加は市民にとって楽しい要素がないため、「おにクル」を試しに使うてもらうことで関わりをもってもらうことを意図している。(向田氏)

#### ■職員の連携

・館内全体で 200 名程度の職員がおり、全員が同じ方向を向くためには、常に顔を合わせて語り合う必要がある。タスクフォースである小さなユニットを組み、それをいくつか組み合わせることで、同じタスクを共有する人同士が常に顔を合わせる仕組みとした。この中からポジティブで前向きな連携がいくつも生まれており、アイデアの多くはこの小さなユニットから生まれている。(久氏)

#### ■地域連携

・地域連携でも用事のある時だけ、また義務だけで参加する人は相手にされなくなる。人と話すのが楽しいという人たちが集まることで、本当の意味の連携や協働が生まれると考える。(久氏)



意見交換・質疑応答の様子

### 3. 参加者アンケート結果

別紙「参加者アンケート」のとおり

以上